降誕日前夕方　　クリスマスツリーのリンゴとクッキー　　２０２１．１２．２４．夕の礼拝

今月の教区報に書いたことをもう少し詳しく話します。私が以前熊本に居た時、クリスマスツリーに、クッキーをぶら下げる習慣がありました。おそらく今もそれをやっているでしょう。どうして、クリスマスツリーにクッキーをぶら下げるのか、聞いてみると、これは、信者さんの中に、子どもの頃ブラジルで育った人がいて、ブラジルの教会では、そんな習慣があったそうです。そして、クリスマスが終わると、そのクッキーをみんなプレゼントにもらって帰るんですね。

「へー！変わったことをするんだねえ。」と最初は聞き流していましたが、クリスマスについて勉強しているうちに、それは歴史的に大切なものを守っている、素晴らしい習慣であることがわかったんです。

そして他にもクリスマスツリーにいろんなものを飾っていますが、その中には赤いリンゴをぶら下げる習慣がよくあります。

皆さんはクリスマスツリーに赤いリンゴの実を見たことがあるでしょう。たくさんの飾りの中に、なぜか赤いリンゴをぶら下げる習慣ができました。緑のクリスマスツリーに赤は、クリスマスにふさわしい色として、定着してきました。

これは、中世のドイツあたりから世界に広まったものだと言われています。

実は、クリスマスツリーというのは、現在は礼拝堂の中に飾られていますが、中世のヨーロッパでは、教会の庭に飾っていたのです。そして、そこでは、毎年、劇が演じられていました。劇はもちろんイエス様の誕生の場面。マリヤさんへ天使がお告げに来たり、羊飼いたちに天使が知らせたり、東の国の博士たちが、宝物を持って来る場面が演じられていました。しかし、これらの劇の前に、もうひとつの劇が演じられていたのです。それは、人間の堕落の劇です。

聖書の初めに、神様は男と女を造り、世界を治めさせようとしましたが、蛇に唆されて、罪を犯してしまったのです。禁断の木の実を食べた話ですね。聖書にはその実が何であったかは書いていません。ところが、聖書をラテン語に訳した時、「悪」という言葉を「マルム」と言いました。そして、「リンゴ」のことは「マールム」と言うので、似たような単語なので、誤読によって、いつの間にか禁断の木の実は「リンゴ」思われてしまい、人類堕落の劇を行う時、リンゴが使われるようになったのです。

しかし、注意して創世記を読むと、エデンの園には、中央に２本の木があったことがわかります。

創世記２章９節『9:主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。』

善悪の知識の木ばかりが、注目されていましたが、もうひとつの命の木というのが、存在するのです。そして、アダムとエバが罪を犯して、エデンの園を追放される時のことについて、創世記３章の終わりにはこんな言葉が出てきます。

『21:主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。22:主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」23:主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。24:こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。』

だから、善悪の知識の木以上に、この「命の木」というのは、大切な木で、それは聖書の最初から、人間には食べられないようにされてしまっているんです。

ところがこの『命の木』が、新約聖書の最後のヨハネの黙示録の終わりの方でまた登場するのです。

ヨハネ黙示録２２章『1:天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。2:川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。』
『14:命の木に対する権利を与えられ、門を通って都に入れるように、自分の衣を洗い清める者は幸いである。』

ですから、罪のためにエデンの園を追放された人類が、最終的に目標とすることは、追放されたエデンの園に帰って、命の木から実をとって食べる事なんですね。

さて、人々を滅びへと導く木と、救いへと導く木の、二本が教会の庭に置かれて、舞台装置となり、人類の堕落の劇が演じられ、そのあとで、救い主の誕生を祝う劇が演じられたのでしょう。

ところが、そのうちに、二本の木は、礼拝堂に持ち込まれて、一本になってしまいました。そして、堕落の劇と生誕劇は、クリスマスイブに読まれるたくさんの日課の中に盛り込まれるようになったのです。今日使っている、クリスマスイブの礼拝式文では、最初に、創世記の人類の堕落の話から読まれました。これは、昔教会の庭で、堕落の物語が演じられた名残のようなものです。

これで、おわかりになったでしょうか。私が熊本にいた時、毎年クッキーを焼いて、それをビニール袋につめて、クリスマスツリーにぶら下げているのですが、それは命の木になる、実。これは、リンゴとは対照的な存在です。

ヨハネの黙示録２２章の先ほどの聖書の箇所によると、命の木の実。そしてその葉には、人の病気を癒し、命を与える力がある、ということが述べられていました。赤ちゃんとしてこの世に来られたイエス様は、その生涯の最後には、十字架という呪いの木に架けられたわけですが、その体を表すのが、聖餐式のパンということが想像つくでしょう。
ヨハネによる福音書３章１６節には有名な言葉があります。
『16:神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』

楽園を追放されて、命の木から遠ざけられた人類が、イエス様を通して永遠の命を与えられる、ということを私たちは感謝しましょう。私たちは、やがて与えられる天国での永遠の命を、今限りあるこの世で、聖餐をいただくことによって、天国のつまみ食いをしているのです。それが、クリスマスツリーに吊るされる、クッキーの意味だということを覚えておいてください。

私たちは、クリスマスツリーを単なるクリスマスの雰囲気を盛り上げる飾りと考えるのではなく、人間を堕落させた善悪の知識の木と、命をもたらす木、十字架などを象徴するものと受け止めて、神様の救いのわざに感謝したいと思います。

そして、クリスマスツリーが片づけられてからも、赤いリンゴを思い出しては、懺悔の祈りをし、また、クッキーを思い出しては、私たちのいただく、聖餐式のパンと葡萄酒の意味をいつも意識した信仰生活を続けたいと思います。